



山本 涼子 議員



JRE山都高森太陽光発電所

自然環境と 太陽光ソーラーパネルについて

山本議員

今、日本中で取り沙汰されている阿蘇の外輪山に貼り付けられた大量のソーラーパネル。熊本県民のみならず、日本中の国民がその変わりはたつ阿蘇外輪山の現状を見て心を痛めている。

阿蘇は世界に誇るべき資産を有する地域と評価され、世界文化遺産への登録を推進。しかし外輪山とはいえ、高森や山都町の牧野跡地には、九州一の広さを誇るメガソーラーが設置されている。熊本の豊富な地下水の産みの親「母体」とも言えるこの阿蘇の地の現状を目の当たりにし、私達は今何を考えるべきか。全国そして北海道の国立公園釧路湿原でも建設工事が進められているが、5年前に当時の環境大臣小泉進次郎氏が、国立公園内での再生可能エネルギー発電所の設置を促す規制緩和を行ったことで、全国各地で日本の景観を無視した開発が加速した。このことから南阿蘇村の草原にも太陽光パネルが設置される未来が訪れる可能性もあると危惧する。そこで、現時点での森林及び農地転用による南阿蘇村内のソーラーパネル設置の件数と、総合面積を問う。

南阿蘇村の現状を認識

村長

森林転用による太陽光パネル設置面積は、8件で1.76ヘクタール、農地転用は51件で11.06ヘクタール。これらの転用が村の景観や自然環境に与える影響について、改めて重く受け止める。

山本議員

森林と農地合わせ、現時点合計が12.82ヘクタール。東京ドームの約2.7倍の広さの太陽光パネルが村内に設置されていることになる。①太陽光パネルの設置は、景観を損ね、多くの問題を引き起こす。②パネルの寿命は最長30年。2040年には80万トン（世界一重たい船の約1.4倍）の廃棄パネルが出る。③廃棄業者の有害物質の認識が低いと適正な処理がおこなわれないケースや不法投棄の可能性も懸念。④パネルには鉛やカドミウム、セレンなどの有害物質が含まれており、破損した場合、南阿蘇の水源や地下水に大きな影響を与える。⑤災害などでパネルが1枚になっても、上のガラスが割れても発電し続ける。むやみに触れては、体が吹き飛ばす程の電気ショックを受けたり、

火災（山火事）が起きる可能性が大きい。⑥火災が起きた場合、感電の恐れがある為、消火作業が難しい。⑦木を切り倒すことで、山肌が露わになり、さらにパネルが熱を吸収することで、周囲の気温を上昇させる「光電気ヒートアイランド効果」の懸念。⑧再エネ賦課金（3兆円/年間）を徴収し再エネ事業を推し進めているが、電気代は上がる一方。

このような問題点があるにもかかわらず、政府が再エネ事業を推し進めていることに違和感しかない。「水が生まれる郷」という自然豊かな南阿蘇村はここに住む私達が、しっかりと守っていく責任があると思う。その為には条例等の見直しが必要である。環境を壊さない、つまり村民の生活環境風土を生かした生業を壊さない取組に力を注ぐべきだと思うが、村長の意見を問う。

村長

本町では貴重な自然環境と景観を守るため、南阿蘇村環境保全条例と南阿蘇村景観条例に基づき、太陽光発電事業規制をしている。大切な水資源や森林がどのような目的で取得されるのか。その動向を注視し、必要な対策を検討・構築していく。

山本議員

大正3年から長年にわたり、戦後の高度成長も支えてきた黒川第1発電所。その復旧現場の視察に行った際、環境に配慮した設計であることや、この水力発電システムで生み出される電気は、阿蘇地域に加え、大津町や菊陽町も賄える量との説明を受け大変驚いた。再生エネルギーの取り組みを考えるのであれば、水路を使った（コンパクト）水力発電はどうか。教育にも取り入れ、自然から恩恵を受けていることを実感し、水を守り環境を守る意識が自然に身につくのではないかと。今やるべきこと、この大切な時代の転換期に選ばれたものの使命だと考える。

村長

柔軟に対応しつつも、この村の財産であるこの自然景観、そして水、米、をしっかりと守っていく方針であることは間違いはない。これから持続可能な村づくりについて、議会の皆様ともしっかりと議論をしながら実行に移していく。